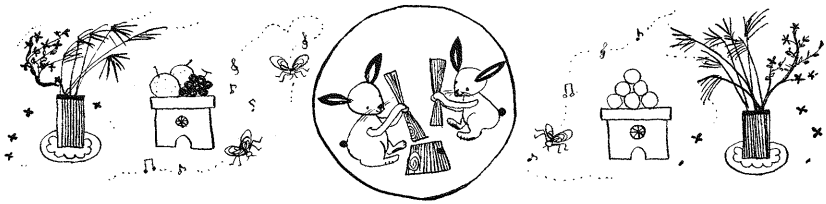


巻頭言

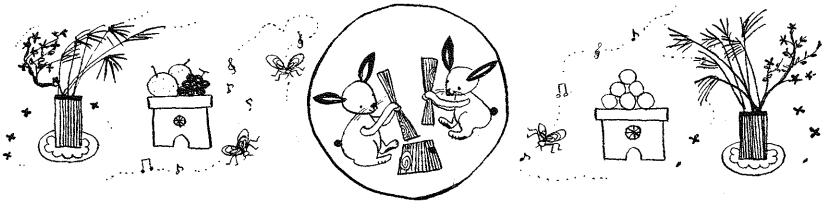
感情が耕される経験としての遊び

加用文男

乳幼児期の子どもたちにとっての遊びの意義はもちろん多様です（知的能力、社会性、感覚性、身体性など）が、私はいわゆる喜怒哀楽（恐怖や驚きも含ませて）に代表される感情の耕し経験こそがメインであろうという考え方をとっています。実は、こういう考え方をとる研究者はあまりいなくて私はごく少数派なのですが、私なりに子どもたちといろいろなかかわりをする中で、そういうふうに考えるようになりました。ややこしい話ですので、ここでは詳しくは述べられませんが、話のきっかけとして、ある遊びの観察例を取り上げてみましょう。

小学校の運動会でリレーを観戦する機会がありました。さすがに六年生にもなると迫力が違います。追い越し追い抜かれ、そのたびに観客がワーッと大騒ぎして、赤、黄、緑のはちまきが入り乱れての大接戦でした。ところがそのさなかに、トップを走っていた子が途中で転んでしまうというアクシデントがあったのです。

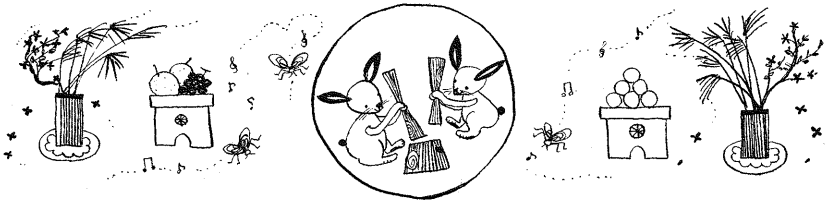
こういう光景は幼児の運動会では見慣れています。幼児の場合、たいてい誰か途



中で転ぶ子が出てくるのです。その子はその後どうするでしょうか？　四歳児なら多くの場合その場で泣き出してしまいますが、たいていの五歳児はさすがにその場では泣きません。泣きそうになりながらも歯を食いしばりながら立ち上がり、また必死で走ります。そして走って次の子にバトンを渡して、チームの子たちが待っている場所にたどり着いて、その途端にしくしくと忍び泣きを始めるのです。これが五歳児の通常の姿です。

では同じような場面で小学校の高学年の子たちはどうするのだろう？　これが私の不謹慎な関心事でありました。六年生の転んだ子は、ごろごろと転びながらも実に素早く立ち上がり、すぐさま全力疾走。何事もなかったかのように走り抜けて次の子にバトンを渡し、遅れて走っている自分のチームの子をチラッと見やってから、近くの味方の子に抱きついています。笑っています。観客席からは距離がありますから声は聞こえませんが、彼の表情から察するに、「やっちまったぜ！　ギャハハ」とでも言っているように見えました。

幼児との違いは明白です。この六年生にとって、リレーはすでにレジャーになっているのです。「おもしれーから」頑張って走っているのであって、自分の存在をかけて、というほどのものではないのです。それはすでに彼らの自我を揺さぶるほどの感情体験ではなくなってきているのでしょう。では彼らにとってはすべてがレジャー的になっているのかといいますと、おそらくそうではないでしょう。たとえ



ばサッカーチームなどに所属して頑張っている六年生が肝心の公式試合でドジを踏んだとして、このリレー場面と同じように振る舞えるでしょうか？　それは難しいのではないでしょうか？　そういう場合は彼らでも悔しさと情けなさで泣けてくるはずです。

遊びと一口に言っても、成長した子どもたちや大人たちにとっては、その時楽しければよい、おもしろければよいというレジャー的活動（「おもしろさの追求」優勢）と、時には自分の存在そのものをかける場合すらある趣味的活動（大人なら、登山、囲碁、将棋、家庭菜園、俳句などなど「その人なりの美的感覚の追求」優勢のもの）は異なるものなのです。そういう区分が成立しているのです（過去の遊び論はたいてい、このうちのいずれかに力点を置いたものになっています）。これに対し、乳幼児期ではそういう分化がまだまだ生じてはいません。未分化なのです。この未分化性が彼らの強みでしょう。ですから学童期の大きい子どもたちとは違って乳幼児期の子どもたちは、一方で、ちょっとしたことで泣いたり、怒ったり、怖がったりなど、すぐに必死になってしまいます。かと思うと、基本はいいかげんですから気分が変わりやすく、おもしろいと思うことにはすぐに手を出していき、その結果、何かあればそれを喜んだり、笑いだしたり、そういう意味で、たわいないという二面性を示してしまうのです。こういう二面性こそが乳幼児期の子どもたちの基本的特徴なのではないでしょうか。

それゆえに、乳幼児期の子どもたちにとって遊びは彼らの幼い自我の揺さぶり、感情の耕し経験そのものとなるのです。もちろん遊びは自主性や主体性などを身につける経験としても重要なのですが、乳幼児期では感情を耕すという面にこそ機能的優位性があるという理解が必要でしょう。今、幼稚園や保育所に出かけて子どもたちと接していると、ああこの子はもう少し腹いっぱい笑う経験をしたほうがいいのでは？　と思えたり、別の子では、この子はもっとケンカさせて怒らせてあげなくては…と思ったり、また別の子では、この子はもっと泣かなくてはいけない、泣けば泣くほど賢くなるだろう、そんな気にさせられる子どもたちが多くいます。遊びの中でいろいろな怖い思い（高い所に登ったり、怖いやまんばに出会ったり、鬼ごっこで捕まりそうになったり、せっかく作っただんごが壊れそうになったり…）を味わうこともとても大事です。そういう耕し経験をいっぱい積むこと、これが乳幼児期を健康的に過ごすということなのだと思います。今、お父さんたちやお母さんたちに、ぜひこういう遊び観をもっていただきたいと切に願っています。

（京都教育大学）

参考文献

加用文男『遊び、自意識、自己肯定感？』「現代と保育」ひとなる書房　二〇〇六―二〇〇七　64～67号。